大阪市立科学館友の会「月刊うちゅう」(2004年4月号、5月号）より

■住田健二　「市立電気科学館プラネタリウムと少年時代の思い出」(2004)

MEMORY

# 市立電気科学館プラネタリウムと少年時代の思い出（上）

住田　健二

**はじめに**

本年7月7日の七夕の日に、我々は大阪における三代目のプラネタリウムの誕生を迎える。東京では渋谷と池袋の同規模機の廃止が相次いで伝えられているご時勢下にあって、大阪にとって初めてというより、恐らく日本全国でも初めての快挙であろう。財政窮乏を伝えられている大阪市が、この時期に日本におけるプラネタリュウム元祖の名誉にかけて、最新鋭機への更新へ決断されたことは、本当に嬉しい限りである。

今でも館内の一隅に保存展示されている初代プラネタリウム（ドイツ・カー

写真1：開館当初の電気科学館。四ツ橋。周囲に高い建物は見えない

4

## K. SUMITA

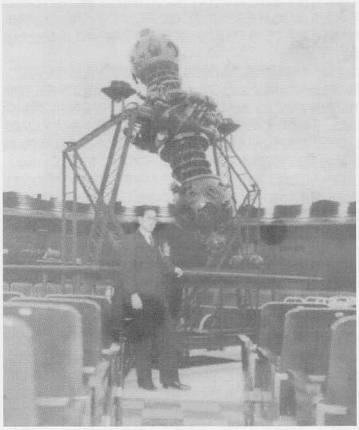


写真2：開館当初のプラネタリウム。
人物は後の館長中村一雄氏

ルツアイス社製）の設置が完成したのは昭和12年3月のことで、7月には日中戦争が始まった年であり、たまたま私の小学校入学の年でもあった。最初はスケート・リンクに予定されていた場所を、当時の最新鋭科学展示であったプラネタリウムの導入に踏み切り、急遽予算追加や既に着工されていた建屋の設計変更等と大変な努力を重ねた成果だと言われている。勿論日本では初の試みであり、東京追随主義をいさぎよしとしなかった当時の大阪の雰囲気が強く感じられる。私なども父親からよく聞かされた自慢話は、東京には無いような御堂筋の道幅と人口では負けるが大阪市長の方が東京市長より高給であるという事であった。

大阪市内で生まれた私はプラネタリウムとこれと同時に誕生した電気科学館の恩恵をもろに受けて育った世代に属し、後述のように少年時代の多くの思い出がこれに関連してくる。しかし、四つ橋のたもとの当時としては珍しい細身の建物を訪問したことがきっかけで、自然科学や工学技術へ進むことになった人々は、私の周囲だけでも沢山おり、なにかの時にその話が出るとそれが京阪

**5**

## MEMORY

神地区育ちだけではなく日本全体に拡がっていたことを知って驚かされるのである。有名な故手塚治虫氏が毎月のように通われた話しや、その思い出が後年の漫画に生かされた話も有名で、今でも科学館には彼から贈られた色紙が大切に保管されている。

そして現在の中之島への移転計画の進行段階では、私が大学生時代を過ごした大阪大学理学部の跡地への移転ということもあって、当時阪大工学部・教授であった私もそれに参画することになり、その後も市立科学館の運営に関与することが続いていた。それが、この度はなんと第三代目のプラネタリウムの設置に参画して、しかもその実現の日を迎える事ができるのである。個人的な事ではあるが、幼少期からのご縁の深さもあって、人一倍の喜びを感じている。

しかも、これは私一人の話ではない。現在の市立科学館の運営を受託している大阪科学振興協会の理事会のメンバーには、理事長はじめそれぞれがあのプラネタリウムに懐かしい思い出を持って、今の市立科学館設立以来のお世話を続けてこられた方が何人も居られ、皆さん心からこの度の新鋭機の始動を喜んでおられる。口の悪い連中は、祖父の代からかついできた氏神様の御神輿の更新だねというが、大阪が誇るこうしたパイオニア的なシンボルならば、それもまた良いのではないか。

### 1. 初期市立電気科学館の思い出　ー子どもの目からみたー

私が母親に連れられて、初めて四つ橋の市立電気科学館を訪れたのは、小学校低学年の時だった。何年生の時だったかは明確に思い出せないのだが、色々な私の記憶の中の館内の模様や事柄とこの原稿を書くために拝借した資料（市立電気科学館20年史）の記録をつきあわせてみると、どうも設立1～2年目くらいらしい。投影の原理など母も分かっていなかった筈だから、大きな部屋の真ん中にどんと据えられたプラネタリウム（天象儀とも訳されたが、この原語がそのまま使われていた）本体を不思議そうに見上げて、あれからどうやって星の光が飛び出して来るのかしらとか云っていた。しかし、私がそうした事に興味を感じるようになったのは大分後のことで、とにかくプラネタリウムの作り出す星空の素晴らしさに感動した。大阪の周辺の地平線のシルエットが描かれたドーム内の空で、西の六甲の方向へ太陽が沈んでゆく。次第に天空が暗くなり、ぽつぽつと星が出始める。そのうちに日頃大阪の空で眺めている星空が出現したのに驚いたけれど、それからさらに一段と暗さが増して、街中では絶対にみることのない小さい星までが全部姿をみせて、全天空が星で被われた時には、何とも言えないどよめきのような嘆声が客席一杯に拡がった。これは、忘れられない思い出で、この後、私は恐らく何十回となくこの瞬間をむかえた筈だが、一緒になる観衆は随分色々だったと思うのに、必ずこのシーンには、聴衆のことばにならない声が伴っていたと記憶しており、この傾向は海外でみた

**6**

## K. SUMITA

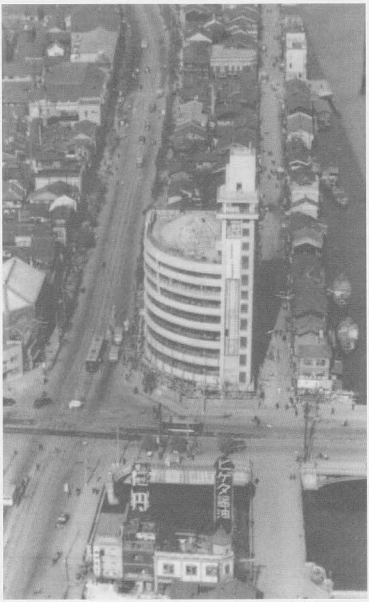



写真3：完成直前の電気科学館。昭和11年11月。地球儀となる屋上のドームがよく見える。ドーム直径は18mだった（毎日新聞社提供）

**7**

## MEMORY

時も同じであったから、世界中今でも続いているのではないだろうか。

それから、「プラネタリウムをみたい」と言い出すと、最初の内は「変な子やな一」といいながらでも、3回に1回くらいは連れていって貰えた。察するに子どもの私はその後で心斎橋の百貨店の食堂でアイスクリームを食べさせて貰えるのが嬉しくてのおねだりであり、母にすれば子どもをだしにして外出し百貨店での買物が出来るという利害関係の一致があったらしい。しかし、プラネタリウムの解説は月替わりだったから、毎月のようにせがまれても、母も付き合い切れなくなった。もう高学年になったのだから市電に一人で乗っていけるだろうとなって、生意気にも小学生が一人で電気科学館へ毎月のように通うようになった。不思議に同級生と一緒にとか、兄姉と出かけたような記憶がない。自宅に近い市電の停留所からは、四つ橋へ直行出来る電車の便はなかったので、一度は電車を乗り換えて四つ橋へ行かなければならない、そのためには大阪市内全体の市電の地図が印刷されているやや大きめの乗換え券を発行して貰うことになる。その手続きを自分一人でやれることが何回か確かめられてから、やっと一人での訪問が許された記憶がある。

もっとも、電気館と呼ばれていた5階以下のいわゆる電気の科学的な説明は、最初の内はチンプンカンプンだった。だから、専らプラネタリウムのお話を聞くのが楽しみだったのだが、その内にもう一つ大きな楽しみを見つけた。屋上に上がるとドームの屋根を利用したスレイト張りの大きな半球状地球儀（当時世界最大だったとか）があり、あの頃は周辺の高い建物というと前述の百貨店しかなかったから、その地球儀の頂上に立って四方を眺めると見晴らしの良さを満喫できる。ドーム内の夜空の素晴らしさもさることながら、こちらの見晴らしもなかなかで、何時でも腕白小僧達が素足で数人駆け上がっては頂上から眺めを楽しんでいた。勿論、私も仲間に入れて貰った。今だったら、きっと職員が来て大目玉になるところだったろう。たまに大人が我々をまねてよじ登ろうとしたが、躰が大きくなると上手く球面にへばりつきつつ上がれないらしく、頂上は専ら子ども専用だったのが痛快だった。

毎月のように通っている中には、その都度電気館の展示も覗くことになり、生意気にもプラネタリウムの解説担当の先生方や電気館の女性職員にも質問をするようになって、顔馴染みになった。前者からは、天文観測に関する少年天文同好会へのお誘いを受けて、日・月食や火星観測に参加させていただいたり、ピックニックにも連れていって貰ったりした。今でも初めて口径の大きい反射望遠鏡を覗かしてもらえた時の興奮や時間とともに視野からずれていなくなってしまう恒星の姿を不思議に思った時の事などが記憶に残っている。一枚だけだが、そうした機会の写真が手元に残っており、殆どお名前を思い出せないのだが、この写真の中で、私の右におられるのは名解説者であった清水技師だろうと思う。一方後者は、入場券のモギリ以外は、一般的な意味での案内が主で、

**8**

## K. SUMITA

**写真4：少年天文同好会の遠足で河内長野の観心寺へ行く。ここは北斗七星を祭っている。前列右が筆者、左が清水技師。昭和13～14年頃**

特に常時に説明や解説の仕事があったわけではなく、いささか退屈な仕事であったのではなかろうか、遊びに行くと控え室のような所で、お菓子などを振る舞われた記憶がある。しかし、一番鮮明な記憶にあるのは、まだ話でもあまり聞いていなかったテレビの電送の実験装置があり、一日数回か、そうした顔見知りの女子職員がモデルになって撮影される映像が、わずか1～2メートルほど離れた所へ電送されてブラウン管上に写し出されていたことだった。今で云うと、ものすごくS/N比（信号と雑音の大きさの比）の悪い土砂降りの画面で、映像が人間の顔らしいとは分るが、髪のかたちから女性かなといった程度のものだった。それでも、当時はやはり他所では簡単に見れるような物ではなく、感激だった。あれは、もう中学生になってからの事だったか、まだ小学生だったのか思い出せず、この機会にと資料を調べたら設立当初からあったものらしい。

（すみたけんじ：大阪大学名誉教授、前原子力安全委員会委員長代理、大阪科学振興協会理事）

9

大阪市立科学館友の会「月刊うちゅう」(2004年6月号) より

■住田健二　「市立電気科学館プラネタリウムと少年時代の思い出」(2004)

MEMORY

# 市立電気科学館プラネタリウムと少年時代の思い出（下）

住田　健二

**2. 移転直前の市立電気科学館の思い出　―大人の目からみて―**

私自身が市立電気科学館を訪ねることは、中学・高校・大学と年齢が増えるに従って次第に稀になっていった。誰かを案内してという事はあったが、自分の興味での訪問はもう卒業した心境であった。何しろ太平洋戦争が激しくなり、大学進学を理工系と決心した頃には、設備もかなり荒廃していたし、新鮮味が薄れて来ていた。それでも、あのドームの中でこの地上に宇宙線が降り注いでいますという話があり、ガイガー計数管を使って計数した結果をスピーカーから出てくる不規則なポン、ポンという音で聞かせてもらった事を覚えているから、やはりときどきは訪問していたらしい。

大学卒業後は東京へ出て就職、原子力関係の実験的な仕事で飯を食う事になってからは、宇宙関係はお隣ながら遠い遠い夢の世界であり、一方電気・エネルギー関連は日頃からの仕事とあまりにも近くて、何らかの刺激を求めて展示を見学に行くような気分にはなれなかった。ただ、原子力教育とかＰＡ（広報）の立場で、科学技術の展示や解説の重要性は十分認識しており、そうした目的の参考にするためにも、海外旅行のついでに有名な博物館を見学出来る機会があれば、それなりに努力はしていた。十数年後に大阪大学へ戻って来てからも、市立電気科学館への訪問は専ら自分や親戚の子どものためとか子ども会のお供という役割に甘んじていた事は否めず、感動を伴うような体験もないままに漠然とした受益者としての思い出があるに止まっている。

それが、にわかに立場を代えて、懐かしいプラネタリウムの稼働状態を気にしたり、予算や展示場の面積の配分を気にする事が必要になってきた。すなわち、最初に書いたように阪大中之島地区の移転後の跡地利用とプラネタリウムの老朽化による更新の必要性が結びついて、今日の市立科学館の構想が生まれ、その展示構想委員会の一員となることを要請されたからである。ただこうした最近のことは皆さんもご存知であるし、また必要なら他に筆者が用意されると思うので、私は何十年ぶりかで、郷里へ帰ってきた者の立場で発見した事をいくつか記しておきたいと思う。いわば設置当時は子どもであった私を魅惑した新世界がどの様な人たちの手によって支えられて保存されていたかである。これは、どこかに記録して置かなければならない事で、もう今を置いては機会がないと思う。

市立電気科学館があった四つ橋地区は、昭和20年3月13日（奇しくも、開設

## K. SUMITA

**写真5：昭和20年3月空襲直後の大阪。左上に電気科学館、右側の大きな建物がそごう、大丸の両デパート、両者の中央が文楽座。**

記念日だった）の大阪初の米軍夜間大空襲で主に焼夷弾による攻撃を受けて、館の周囲のみならず、市街中心部は殆ど焼失した。しかし、幸いにして関係者の努力によってあの8階建の建物は奇跡的に救われたのであった。当時中学3年生であった私は、翌日に徒歩でこの地区を尋ね歩き、なつかしい電気科学館が無事な姿でつっ立っているのを見てひどく嬉しかったのを覚えている。勿論屋上の天体観測室の焼失や多くの被害はあったが、とにかくプラネタリウム本体は無事だった。これに先立つ3月10日の東京大空襲で有楽町の東日天文館にあった姉妹機は既に消滅していたので、これから戦後のかなり後までは、わが国におけるただ一基の大型プラネタリウムとしての活躍が始まったのである。

この時期にあっては、四つ橋のプラネタリウム観賞は全国からの関西地区修学旅行には不可欠のコースとなっていた。ある意味では、その存在が最も華やかとなった時期であったが、他方では、いつ運転が休止されてもおかしくない状態でもあった。装置の老朽化の進行と、必要な交換部品が入手できないという厳しい時代が続いた。この間の保守管理の責任にあたった人達の苦労は想像に難くない。ヨーロッパでは多くの同型機は殆ど消滅もしくは稼働不能となり、

**15**

## MEMORY

世界中でわずかアメリカにある数基のみが稼働していた時期であった。

原生産地イエナは東独に属しており、そこからの部品入手はもう不可であろうと思われていた。しかし、東独と日本の国交が開始される日がやってきて、早速連絡をとった担当者が驚いたことは、かって日本へ輸出した機材については、戦禍を越えて全部図面が残されている、発注さえすればなんでも製作出来るぞという返事が返ってきた。日本で装置を守ってきた人たちの努力、数十年もその図面を保管してきたという製造者の在り方、この人たちの職人魂こそがあの複雑なプラネタリウムの長期運転を支えてくれたのである。科学・技術の最先端の局面で多発しているトラブルを聞かされる事の多い今日、急速に失われてきているものを改めて反省する機会を与えられたように思える。

それと、これはもう時効だからすっぱ抜きをしても許されると思うので、あえて書かしていただく。旧電気科学館が閉館されて中之島へ移転する、そしてあの亜鈴型の懐かしいプラネタリウムが更新されて別の機種になると知って、多くの人たちがその稼働中の再訪を希望された。当時から私達の大阪科学振興協会の理事長を勤めて下さっている森井清二氏もその一人であったのだが、同氏は当時関西電力社長の激職を勤めて居られた。従って、こうした移転関係の

**写真6：科学館の運営母体である大阪科学振興協会の理事会風景。平成15年6月。左端が森井理事長、向うの列は左から土崎理事、大西理事、住田理事、高橋理事、手前後ろ向きになっているのは千地理事**

**16**

## K. SUMITA

予定の報告に赴いた電気科学館の担当者に「自分も稼働中にはもう一度みてみたいな」ともらされた言葉を、どちらかというと儀礼的に受けとめていたらしい。ところが、いよいよ閉館数日前になって、突如として関西電力の秘書室から社長の時間が作れたからこれから伺いたいがとの連絡が入った。関係者の狼狽は推察にあまる。中学生時代の若き日の思い出があってねとのお話を別の所で聞いていただけに、私は改めて技術者としての先輩格の同氏の何かに打たれる想いがした。

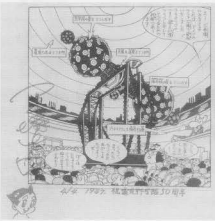
語り出せばとめどがなくなるのが、年寄りの証拠だそうだから、こうした話はこの辺にしたいが、私達の世代は当時の最新鋭教材を与えられて、多くの刺激を受け、夢をはぐくんで育てられた。今日の苦しい大阪市の財政の中から与えられた貴重な機会を十二分に生かして、将来の教育に寄与すること、そしてその機会に遭遇した関係者にとっては、絶好の報恩の機会であると云うのが、私一人だけの考えではないと信じている。

(2004. 4. 6)

（すみたけんじ：大阪大学名誉教授、前原子力安全委員会委員長代理、大阪科学振興協会理事）

### 手塚治虫とプラネタリウム

住田先生が手塚治虫に触れているので補足しておきたい。手塚は電気科学館閉館間際にテレビ取材（1984年頃）と講演で（1987年）2度来館した。講演は開館50周年記念のためだったが、閉館が2年後に迫っており、やや異様な雰囲気の中での講演であった。その折に描いてくれた色紙の1枚がこれである。



本誌1985年7月号には「懐かしのプラネタリウム」という一文を寄せてくれた。機会があればお目通しいただきたい。珠玉のエッセイである。（加藤賢一）

**17**